

「動いている庭」から「野原」へ ——ジル・クレマンにおける風景と環境¹⁾——

山内朋樹

はじめに

哲学者アラン・ロジェは「動いている庭から惑星としての庭へ」と題された論文のなかで、フランスの庭師、ジル・クレマン (Gilles Clément: 1943-)²⁾ の印象的な言葉を引用している。

わたしの考えでは、庭とは風景と環境を含んでいる。風景とはわたしたちの周囲の、わたしたちが知覚するものの文化的な部分であり、環境とは、少しばかり客観的で科学的な部分である。庭とはまさに、人間の自然との関係の現実である (Roger, 2001, p.87)。

ここで風景 (paysage) とは、「知覚されたものの文化的な部分」として読み換えられており、それにたいして環境 (environnement) は「客観的で科学的な部分」として言い換えられている。2012年にコレージュ・ド・フランスでおこなわれた講演のなかでも、クレマンは風景を「まなざしの広がりのもとにあるもの」と規定することで、この立場をいっそう鮮明なものにしている (Clément, 2012, p.19)。

感じられたもの (とその転写、たとえばタブロー。つまり最初の修景家は画家であり、作業者ではない) が問題なのですから、風景は本質的に主観的なものとして現れます。風景は個人的な体験や文化的な被いでつくられた強力なフィルターを介して読まれるのです (Clément, 2012, p.20)³⁾。

こうした風景の定義にたいして、環境はそれと対称的にわたしたちの周囲にあるものを「客観的な解説のもとに置こうとする」ものとして位置づけられている (Clément, 2012, p.21)。しかしながら、こうして風景と環境を対立させ、それを主観と客観、文化と自然の対比関係に重ね合わせていく議論はむしろありふれており、同時代の風景論を一瞥するなら、そこに特別な着想はないだろう⁴⁾。この図式を引き受けつつ、アラン・ロジェは冒頭のクレマンの言葉にこうつけ加えている。

わたしは、ジル・クレマンが文化的な (付け加えるなら、美的な) 実在としての風景を、客観的計測 (汚染率や騒音など) や科学調査に従属する環境から区別するならば、完全に彼に同意する。このことはつまり、風景の価値を生態学的な価値から切り離すようにする。それは多くの場合困難な課題だが、なんとしてもやらなければならない (Roger, 2001, pp.87-88)。

この応答からは、クレマン以上に徹底的に風景を環境から峻別しようとする態度が見てとれる。美的な風景は、生態学的な環境から明確に区別しなければ、またたく間に拘束され、その輝きを失ってしまうかのようだ。こうした言葉には、ロジェの庭園観が色濃く反映されている。ロジェによれば世界各地にある伝統的な庭園群は、風景と同じく美的機能を持っている。しかしながらクレマンが庭と呼ぶものがあまりに生態学的な関心にしたがっているため、ロジェはそこに矛盾を見てとっている。この美学者が恐れているのは、おそらくは土地土地の環境の特性から風景や庭の美的側面が決定されるとする環境決定論であり、またこうした発想によって文化の多様性や自由が制約を受けてしまうことだろう。それゆえロジェにとって風景や伝統的庭園は、たんなる環境や生態学的価値から区別されなければならない⁵⁾。

たしかに先のクレマンの言葉も風景と環境をこうした図式で整理しているように思える。しかしロジェが、風景と環境をクレマンが区別するなら同意しよう、とわざわざ遠回しな表現をしていることから推察できるとおり、この庭師が重視しているのは両者を区別することではなく、それらがどう関わっているかなのである。彼にとって風景と環境はともに庭を構成する重要な要素であり、その庭とは「人間の自然との関係の現実」なのだ。冒頭の言葉からは、このフランスの庭師が風景と環境、あるいは人間と自然の関係を、庭をとおして一種独特な仕方であらわしていることが分かる。ここで風景は庭をとおして環境と結びついている。しかしどのようにして結びついているのだろうか。

本稿では、クレマンの庭とその背景の検討をとおして、クレマンにとっての風景と環境について考えてみたい。まずはパリ15区のセヌ左岸に位置するアンドレ＝シトロエン公園 (Parc André-Citröen) を傍証として、クレマンの基本的な考えを確認しておこう。

1.

アンドレ＝シトロエン公園は有名なフランスの自動車メーカー、シトロエンの工場跡地に1986年から1998年にわたってつくられた総面積14haに及ぶ広大な公園である【図1】。この公園の設計にあたっては、修景家と建築家によるチームが要求され、コンペティションの結果、アラン・プロヴォとジル・クレマンが率いる二組が選出された。この公園で目につくものは、公園内の最も高い位置にそびえる二つのガラス温室とそれらのある噴水施設、そこから眺望される強い軸線と広々とした芝地、この軸線を強調するために刈り込まれたボスケとそれに沿ってセヌ川へと緩やかに下降していく地形、また軸線に斜交いに交わっているもう一つの軸線など、きわめて構築性の高い部分だろう。公園内最上段の噴水の位置から遠望されるセヌ川を、かつて17世紀の整形式庭園を牽引した庭師、アンドレ・ル・ノートルが得意とした人工池として見立てるならば、17世紀のフランス整形式庭園の地割りがすぐに想起される。

ボスケ内に配されたテーマ別の色彩豊かな小庭園もさることながら、ジル・クレマンの出世作として著名なこの公園内で注目すべきは、プラン左下に位置する「動いている庭」(Jardin en mouvement) という区画だろう【図2】⁶⁾。この場所ではきわめて雑多な草花の数々が、ほとんど規則性を持たずに混ざりあっている。そもそもこの区画は、パリの冷涼な気候や公園の乾燥

した状況に適すると考えられる種子が選抜され、すべてを混ぜ合わせた上で播種した区画だ⁷⁾。このため、アンドレ＝シトロエン公園全体の設計が伝統的手法を引き継いでいるといっても、「動いている庭」には緻密に刈り込まれた刺繍花壇もなければ、色彩豊かなボーダー花壇もない。ところどころに草花が刈り取られた通路らしきものが見つかる他には、萎れた花柄さえも摘まれることなく、数々の植物が繁茂している⁸⁾。この公園にはプラン下部のセヌ川から上部方向に広がっている都市に向かって、段階的に自然から都市へと推移していくという構想があり、「動いている庭」はもっとも自然度が高い区域に設定されたプラン左下部を占めている。プラン左側を占める、同じくクレマンが手掛けたボスケ内のテーマ別的小庭園と比べてもその異様さは一目瞭然であり、混合された種子を播くというつくり方からしても、ここは庭というより放置されて数年を経た空き地や放棄地に近いように見える。しかしながら、ここには一般的な空き地や放棄地には見られないような植物種が見られる点で、そしてまた単一の植物に占拠されていないという点でも——要するにその多様性によって——そうした空間からははっきりと区別することができる。

たしかにここには数多くの花々があり、多彩な植物種が共存している。しかし「動いている庭」は見かけ上の違いや種の多様性だけで放棄地や他の庭と区別されるだけではない。たしかに多様性とは、まずは種の多様性を指している。しかし種の多様性とは、必然的に種の振る舞いの多彩さをも生み出していくだろう（Clément, 2004, p.29）。種の多様性は、種の振る舞いの多彩さとともにあるのである。これは種そのものに着目した分類上の多数さと、それら種相互の関係——生物学的事実とクレマンが呼ぶもの——に着目した生態学的な多彩さと言い換えることができるかもしれない⁹⁾。植物の多彩な振る舞いのなかでもとりわけクレマンが着目しているのは、植物が各々のやり方でまさしく動いているという点である。この庭の草花は、「動いている庭」という名のとおり、本当に動いているのである。

たとえば種子を散布するタイプの植物の場合、種子は風や水の流れ、動物や人間の移動を介して拡散され、移動する。種子が辿り着いた場所に適合すれば、その種は翌年、突如として異なる場所に群落を形成するだろう。そもそも、植物がこうして動いてしまうからこそ、庭では雑然と重なりあう諸要素を切り離すために縁石や生垣、パルテール、園路、緑のアーチなどの境界によって植物を仕切り、プランにしたがって秩序立ててきた（Clément, 2007 (1991), p.20）。こぼれ種や地下茎などで境界の外に進出してしまふ植物群は、雑草であれ園芸品種であれ、手入れのなかでは処理すべきものでしかないだろう。「それゆえ、この秩序を維持する技術の数々、つまり剪定、刈込、枝打ち、除草、支柱、誘引等々がある」（Clément, 2007 (1991), p.20）。クレマンはこうして維持される秩序を「静的秩序」と呼んでいる。言い換えるなら、そこでの植物は人間の意図や行為を代行している（ここから先は立ち入り禁止、ここで左に曲がる、ここではあちらに視線を投げかけるなど）。しかしひとたびこの代行された意図を植物から振り払うならば、植物、ひいては庭の管理方法はまったく異なるものに変貌し、植物とその環境がつくりだす生態学的な秩序、すなわち「動的秩序」が露わになってくる。

他のありふれた庭ではどこでも、植物は植え込みやミクスト・ボーダー、パルテールなどに集められていた。それに反して、ここには「良い」とされる草花と「悪い」とされる草

花を分けるための物理的境界はない。こうして草花は良いものも悪いものも隣り合い、絡み合っているとすれば、花々のまとまりの位置と形を決めていくことになるのは、こうした植物の生物学的なありようである。そしてこの生物学的なありようも、種と時間に応じてとても変わりやすいので、当の花々のまとまりはあらゆる種類の動きにつきしたがっている。その結果、庭の外観には絶えざる変更が生じる。というのも、ここで話題にしている花々のまとまりは、どの庭でも見られるようにただ季節次第で変化するだけではないからだ。さらに、とりわけそれは庭の予想しない場所に現れては消えるので、その歩みは一瞬たりとも同じではない (Clément, 2007 (1991), p.51)。

こうして絶えざる変化を示す「動的秩序」とは、個々の植物が要求する湿度や日照、土壌のpHや肥沃さ、競合植物との関係などから決定される秩序、ようするに環境の秩序である。日照が弱く土壌の湿度が高い場所にはある種の植物が優勢的に繁茂するだろうし、別の場所では日照が強く乾燥しているのもまた異なる種類の植物が繁茂する。クレマンも好むジギタリスは、パリの涼やかな環境に適する種としてアンドレ＝シトロエン公園の「動いている庭」にもその種子が播かれている¹⁰⁾。高い花軸に釣り鐘状の花を総状につけるこの植物は、その長い花軸から周囲に種子をまき散らし、生育環境が整えば次々と広がっていく。それゆえジギタリスは「静的秩序」を維持する植え込みから飛び出してしまい、園路にも顔を覗かせることになる。

「静的秩序」の庭では、定められた植え込みからはみ出たジギタリスは、望ましいものではなくるとみなされてきた。つまり、このジギタリスは無秩序を生み出す。「動的秩序」の庭では、放浪するジギタリスは、場の進化のある局面を翻訳している。無秩序とは、反対にこの進化を中断することにあるだろう (Clément, 2007 (1991), p.21)¹¹⁾。

つまりここでジギタリスは人間の意図を代行するのではなく、それとはまったく異なる「場の進化のある局面」、すなわち生物と物質が組み合わされながら進展していく環境の現状を「翻訳している」。こうした植物の動きは、それゆえ庭の形にきわめて強く関与してくることになり、庭の形を拘束し、変形し、違ったものにしてしまう。それではクレマンの庭はアラン・ロジェが危惧したように環境の特性によってそのありようが決定されてしまうような庭なのだろうか。しかし、ここで「翻訳」という言葉が使われていることに注意すべきだろう。環境の特性は植物を媒介して人間に分かるように、人間と結びつくことができるように変換されている、ということを経験は暗に示唆しているからだ (環境の特性をまったく理解せずに、人間の意図を代行させるのではなく)。このとき、植物の動きを語る人間の言葉も、庭のものから生態学のものへと翻訳されていく。クレマンは伝統的庭園で庭の形を記述してきた生垣やパルテールといった庭の用語に、たとえばマント群落やソデ群落などといった植物生態学の用語をつけ加えることを提案している (Clément, 2007 (1991), pp.20-21)。庭の用語も植物生態学の用語も植物の形を記述するために用いられてきたものだが、両者はまったく異なる観点で植物の秩序や形を記述しているからだ。庭の形を変容させるのは植物だけではない。そこにはそれを解釈して方向づけていく人間の営みが結びついている。

この絶えず変化する庭に迷い込んだ人間が、どちらに向けて足を踏み出すのか、どこで立ち止まるのかという行為も、この庭の植物の状態——つまりそれが鬱蒼と茂っているのか、短く芝状に刈りとられているのか、花が咲いているのか、萎れてしまっているのか——にも強く依存しているだろう。ここでは伝統的な庭とはまた異なったかたちで、庭師による植物の管理が結びつけられているのである。

ある瞬間の園芸の状態、あるいはむしろ、ある瞬間の生物の状態と言ってもよい。それは週ごとに、あるいは月ごと、そしてもちろん一年ごとに他のものに変わりうる。この変化が偶発的に速くなる例として、辺りのフランスギク (*Leucanthemum vulgare*) が花期の終わりに芝刈り機で短く刈りとられるのを思い浮かべてみてほしい。こうして花の咲いた草地は芝地になり、その結果、ここでは人の歩みはまったく違うものになる。それは容易になって、誘発される。花の咲いた草地では、程度の差はあれ人はゆったり歩いていたのに、短く刈られた芝地になると、地面の性質そのものに思いを巡らすこともなく、どこなら足を踏み出せるかを知ろうともせず、歩いていこう (Clément, 2007 (1991), p.51)。

人は花が咲いていれば立ち止まり、枯れてしまえばとおりにすぎしてしまう。だからこそ、庭師が萎れた花の茂みを短く刈り取ってしまえばそこは立ち入ることのできる園路になり、園路だと思っていたところに別の植物が芽吹いてしまえば、そこはもはや園路ではなくなってしまう。「動いている庭」の植物は、生態学的な環境の特性を翻訳していた。しかしそれだけでは、ここは庭ではなかったかもしれない。植物によって拘束され、変形された庭も放っておけば極相に向かって遷移が進行し、いずれは森に吞まれてしまう (少なくともパリが属する西岸海洋性気候区では)。この空間が放棄地へと遷移することなく、「動いている庭」と呼ばれうるのは、人間が環境の特性を翻訳する草花の動きを読みとり、その動きに合わせて刈り取ったり、ときに庭の園路をも迂回させながら、遷移を制限し、植物の移動を際立たせるように管理しているからだ。

昨日はここを歩いたのに、もう歩けなくなっている。通れなかったのに、今日は通りぬけられる。それゆえ、通り道や植物が生える場所のこの絶え間ない変化こそが、動きという語を裏づけ、この動きを管理している事実こそが、庭という語を正当化する (Clément, 2007 (1991), p.52)。

「動いている庭」での植物の動きとは、それゆえ生物と物質の秩序が結びついた生態学的な環境の特性であるだけでなく、ここを訪れる人々の振る舞いや、植物の動きを解釈し、方向づける人間の手入れとともにある。動いていながらも、その都度まるで鳥のようにまとめられている草花や、季節ごと、年ごとに形を変える鳥と鳥の間に残された園路は、ここを訪れる人々と庭師によってつけられた人間の手跡に他ならない。生のままの自然や放棄地ではあまりに雑多で理解できなかった植物の動きが、こうした手跡によって見えるようになっているのである。

そうだとすれば、この庭も管理されていることには変わりないのだから、伝統的な庭と同じ

ものなのだろうか。文化的で美的な「風景」と生態学的で科学的な「環境」を峻別しようとしていたアラン・ロジェは、アンドレ＝シトロエン公園の「動いている庭」を評して、庭は解釈を提示するものである以上、そこで示されるのは「秩序の程度」であり、「[...] 自然な印象も実際には技芸 (arte) の所産である」と述べている (Roger, 2001, p.72)。こう言うことでロジェは、この庭がいかに特殊なものであっても、結局のところ文化的で美的な原理にしたがって作られたものでしかないと表明しているだろう。この庭は、ロジェが言うような「風景」にしたがってつくられたものでなく、ここでの管理は伝統的な庭の管理と程度の差しか持っていないのだろうか。しかしこう言うてしまうなら、「動いている庭」で行われている実践の重要な点は単純化されてしまう。

強調しておきたいのは、「動いている庭」ではロジェが文化的で美的な風景に対立させた生態学的な環境、つまり植物や土壌や水などが、風景とは異なる仕方では庭を拘束し、変化させ、形を変えていることだ。ロジェが風景から切り離そうと試みた環境は、人間とは異なる能動性をもってこの庭の形成に参加しているし、そのときの形や状態によって人間を導き入れたり拒んだりもしている。庭師はたしかにある文化的で美的な一連の意図をもって庭を整備し、管理することになる。このため人間の意図は庭のありようをとおして環境へと移行し代行される (たとえば植物の動きがいくつかの花々の茂みへとまとめられ、小道がつくられる。膝まである草花の茂みは通行を拒み、草丈の低い小道は人を誘う)。しかし環境の変化や動きそのものも、庭のありようをとおして風景へと移行され代行されている (通路に草花が芽吹くことで人は足をとめ、このあいだはなかった花々に驚き、それらを眺めやる)。ここでは、人間と人間以外の諸存在はともにこの庭を構築しているので、ロジェの言う「風景」と「環境」は、相互に翻訳しあう錯雑した連関のなかから極端なかたちで引き出される「二つの理解の仕方」にすぎないことが分かる。

土壌の pH と空間における樹木のちょうど良い場所とは、極端な考え方をしてしまうと区別される環境の二つの理解の仕方となる。しかしこの庭という広りのなかでは、その重要性において同等なのである。このことは、自然的なものや文化的なものを結びつけて調整する、他のあらゆることについても同じように言える (Clément, 2007 (1991), p.264)¹²⁾。

クレマンが庭には風景と環境が含まれていると言うのは、ある場所に樹木を植えることができるのは、その樹木が土壌の pH や日照や湿度、すなわち環境と適合しなければならないからであり、同時に庭の外観、すなわち風景にとって好ましい位置にもあるからである。クレマンは方法的に不十分なために風景と環境を分けていないのではないし、ロジェが危惧するように環境決定論に与しているわけでもない。「動いている庭」は、文化的で美的なもの、すなわち風景と、生態学的で科学的なもの、すなわち環境を混同できるような特異な空間をつくりあげている。ここでは風景の特性と環境の特性は交換されている。しかし環境について語る言葉が風景について語る言葉へと翻訳され、風景について語る言葉が環境について語る言葉へと翻訳されるとはどうやって可能になるのだろうか。「動いている庭」でおこなわれていることを理解するためには「谷の庭」(Jardin de la Vallée) や「野原」(Champ) と呼ばれる場所での植生実験、また

植物の移動と手入れを詳細に記したダイアグラムなどを参照することができるだろう。次節では「動いている庭」の前史に光をあてることで、クレマンの手法に即して、いっそう具体的な場面で風景と環境が交換されていくところを考察したい。

2.

アンドレ＝シトロエン公園に着工する前年にあたる1985年に、ジル・クレマンが「飼ひ慣らされた荒地」と題する論文を発表していることは示唆的である¹³⁾。ルイザ・ジョンも言うとおり、『動いている庭』という著作を刊行する六年前に、この論文のなかでその着想がすでに示されているからだ（Clément, 2006, p.19）。この論文を発表する八年前の1977年、クレマンは自邸と庭をつくるために、フランス中央部のクルーズ県に6,000㎡に及ぶ荒地（friche）を、厳密に言えばかつて放牧がおこなわれていた放棄地（délaisé）を購入し、そこで植生実験を開始している。「飼ひ慣らされた荒地」では八年にわたるこの植生実験の成果が記されていることから、クレマンは〈動いている庭〉の着想を荒地からえたことが分かる。大型のハナウド（*Heracleum Sphondylium*）が咲き乱れるこの場所は「谷の庭」と称され、今もクレマンにとって〈動いている庭〉の着想の源泉となり続けている【図3】。

〈動いている庭〉は荒地から着想される。というのも荒地とは、そこに身を落ち着けた種の成長が自由へとゆだねられている生の空間だからだ。この種の空間では、そこに満ちているエネルギーの数々、つまり成長、対立、移動、交換は、障害となるものにはほとんど出会うことがない。普通生じる障害とは、自然にたいして幾何学的な形や清潔さ、あるいはそのほか外観を特権視するようなあらゆる文化的原理を強いるものである（Clément and Jones, 2006, p.18）。

荒地には、前節でとりあげたようなクレマンの庭の特徴がいっそう鮮明なたちで見いだされる。というのも荒地は、クレマンが「静的秩序」と呼び、ロジェが「風景」という言葉に仮託した幾何学的な形や清潔さ、外観を特権視する文化的原理とは無縁だからだ。放棄され森と化していた谷を切り開きながら、クレマンはこうした原理を強いられていない植物が、驚くほど自由に放浪していくのを発見し、それを描き留め、どうやってこうした動きに手を入れていくかについて考えを巡らせている。

この放浪の働きには興味をひかれずにはいられない。なぜこのユーフォルビア（euphorbe）やオダマキ（ancolie）は悪いものとみなされるのか。それらが定められた空間から出るからだろうか？ ユーフォルビアやオダマキは今日は草むらや通路にあり、明日にはまた別のところにあるだろう…

ロゼットの葉叢、ハナウドやセイヨウナツユキソウ（spirée ulmaire）、大きなホルトソウ（épurge）からなる大きな草花の島は残される。それらはまもなく二、三週間の内に（春なので）花を咲かせるからだ。[...] これらの草花や葉叢をとり除くのは、早咲きの種に関し

ては六月、他の種については七月や八月、遅いものについては秋である。見た目の悪さや（花や葉が萎れた）、他の理由によって（二年生植物のサイクルが終わる、植え込みの美観の修正など）とり除くべきときが来たら、芝刈り機をかければ十分だろう。まもなく、その跡には再び草花が生えて芝地になる。何日か前にはまだ雑多な種の花軸が成長していたその場所は歩けるようになる（Clément, 2007 (1991), pp.61-62）。

枯れたり萎れたりした草花は刈り取られ、そこに新たな道がつくられる。もうすぐ花を咲かせる種は道の上に芽を出しても保存されていく。前節で確認したように、「動いている庭」とは、人間の文化的で美的な原理を、環境へと一方的に定着させていくことではなく、環境の自律的な能動性を捉え、それにあわせて風景を切り出してくる試みだった。ここでの管理は、サイクルの終わった植物を刈り取るなどの環境から来る理由と、植え込みの美観の修正という文化的で美的な理由などが折り重なっており、こうして目まぐるしく形を変えていく草創期の庭での実験記録は、「動いている庭」がどうやって管理されているかを明らかにしている。

こうした植物の動きと手入れとの関係は、別の場所で興味深いダイアグラムに詳しくまとめられている（Clément, 2007 (1991), pp.232-233）【図4-9】¹⁴⁾。ダイアグラムとして植物の配置を記録していくクレマンは、ほとんど植物学者や生態学者のまなざしを持って環境の状況を記録しているだろう¹⁵⁾。こうした記録が重要なのは、そのままではなかなか気づくことのできない植物の、ひいては環境の自律した活動を克明に知ることができるからだ。「動いている庭」では、手入れによって植物の動きを強調し、見えるようにしていた。しかしこのダイアグラムも、人間の時間感覚からすればあまりにゆっくりとした植物の変化を俯瞰できる六つのダイアグラムに移行させることで植物の動きを際立たせ、そこでなにが起こっているかを理解できるものになっている。

ここでもアンドレ＝シトロエン公園の「動いている庭」と同じように、まずはじめに種子が播かれている【図4】。九月に播かれた種子は十月上旬には発芽し、植物の群生（イネ科植物と一年草が多く、二年草と多年草も混じっている）は環境の特性を翻訳しながら徐々に群落を形成していく【図5】。翌四月にははっきりとした形をとっていないが、多くの多年生植物が広がってきたため【図6】、七月には「適切な機械を使って鳥々の輪郭を手に入れる」（Clément, 2007 (1991), p.233）。それは歩く場所を確保するためであり、「輪郭」と言っていることからある程度は文化的で美的な判断にもとづく行為だろう。しかしひとつ前の図と見比べれば分かる通り、この形の決定は植物の状況に拘束されている【図7】。二年後、鳥々は統合や分裂を繰り返し、そこにクレマンの手も入ることでまた形を変えている。中央の樹木はかなり大きくなって影をつくっているため、足もとの草花が右下の方へと逃げ出しつつあるのが分かる。またその他の鳥もまだ少しずつ動いている【図8】。数年後、さまざまな樹木の若木が芽生えてきたために草花の鳥は後退し、その配置もある程度限定されてきている【図9】。これはほとんど動くことのない樹木が光の射す場所を限定してしまうからであり、また動きの速い一年草や二年草に変わって多年草が増加したからでもあるだろう。クレマンはここからさらに数年後に、若木を部分的に取り除いて草花の動きをもう一度活性化させている（Clément, 2007 (1991), p.233）。

このダイアグラムは一方で生態学的な環境の綿密な記録であり、他方ではクレマンの文化的

で美的な判断とともに見いだされるものでもある。ダイアグラムという媒介をとおして植物の動きは俯瞰され、群生する植物の「輪郭」を手入れという媒介によって見えるものとし、その場は再びダイアグラムに記載される。クレマンは風景と環境という両者の間隙をダイアグラムを片手に、生態学者から庭師へ、庭師から生態学者へと移行しながら庭の手入れをしている。ここでは環境の特性から一挙に風景へとまたぎ超えることはなく、また風景の特性を一挙に庭に押しつけることもない。そのあいだを媒介するダイアグラムは少しばかり環境の特性を帯びているし、そこにある形やパターンが見えてくる点で少しばかり美的で文化的な特性をも帯びている。ここでダイアグラムと環境は互いの特性を交換しながら、風景に関与する「輪郭」を形づくっていくのである。

こうした彼の方法論は、「どういった種類の「庭仕事」に着手するかを決めるために、諸存在の相互作用を解釈すること」であり、それは「庭師を観察者以上、作業員以下に」するという（Clément and Jones, 2006, pp.18-19）。しかし庭仕事をほとんど放棄するかに見える「観察者」と「作業員」のあいだに立つ庭師の形象とはきわめて特異なものだろう。またこうした方法をとるクレマンにとって、文化的で美的なものとしての風景はどういうものなのだろう。ここまで「動いている庭」から「谷の庭」、そしてダイアグラムへと、徐々にクレマンの着想の源泉となった荒地、あるいは放棄地に接近してきた。次節では「野原」での植生実験をとりあげることで、荒地にさらにもう一步接近し、この内実を明らかにしてみたい。

3.

「谷の庭」に隣接し、「野原」とだけ呼ばれるこの場で実験が開始されたのは、アンドレ＝シトロエン公園工期中の1995年のことだ【図10】。ここでの実験手法も「動いている庭」や「谷の庭」と同じで、あらかじめ土地の環境に合わせて選抜された六五種の植物の種子がいっせいに播かれている¹⁶⁾。クレマンは、ここで植物や昆虫、そして動物が織りなす生態系の観察をおこなっている。その名からも分かる通り、ここは庭ではなく、観察のためだけにあてられた場所ではない。しかしながら、クレマンが自分の仕事をもっともよく示す事例だと言っていることから、ここが彼の庭を考えるうえで特権的な場所だということが推察される（Clément, 2007 (1991), p.260; Clément and Jones, 2006, p.62）。

約7,000㎡の敷地面積を有する「野原」は、「谷の庭」の森に隣接する開けた平原であり、夏には強い日差しと乾燥に晒される。周辺は家もまばらな農村地帯であり、ほとんどが牧場となっている。現在は多様な草花が入り交じった状態で咲いているこの土地も、もともとは牧場だったため、購入したときにはカモガヤ (*Dactylis glomerata*) という飼料用の牧草が全面に繁殖した放棄地となっていたらしく、土壌は痩せた花崗岩の砂利でできているため、酸度が高く、ヒメスイバ (*Rumex Acetosella*) があちこちに生えていた。クレマンはこの土地を耕して整地し、1995年5月7日に乾燥と酸性土壌に強い65種類の種子を播種している¹⁷⁾。実験開始後、まずはハゼリソウ (*Phacelia tanacetifolia*) やムギセンノウ (*Agrostema githago*) などの一年生植物が繁茂した後衰えていき、入れ替わるように二年生のジギタリス (*Digitalis purpurea*) やビロードモウズイカ (*Verbascum thapsus*) が混ざっていく。そして十年たった頃には多年生のセイヨウノ

コギリソウ (*Achillea millefolium*) やヒメリトラノオ (*Veronica spicata*), ジャコウアオイ (*Malva moschata*) などが安定的な植生をつくっていった。「野原」では基本的に植物や昆虫、動物などが観察され、その記録がとられるだけであり、この場所がこれまでの「動いている庭」や「谷の庭」以上に荒地や放棄地の状況に近くなっていることが分かる。

しかしながら、ここには年に一度だけ人の手が入る。毎年11月におこなわれる草刈りがそれだ。「動いている庭」から「谷の庭」を経て、放棄地に近い「野原」まで辿ってきたとき、最後に残される人間の行為、あるいは庭師の作業とは、草刈りなのである。この手入ればたんに「野原」の全面にわたっておこなわれるため、風景にたいする文化的あるいは美的配慮とはほとんど関係がないように思える。だとすれば、この草刈りはいったい何をしているのだろうか。

例年二回、春と夏の終わりに行われる植物の記録は、種の分布と数が毎年変化していることを示している。こうした環境の可変性は太陽を好む動植物の営みに由来しており、この営みは年に一度の草刈りでその勢いを取り戻し、思いがけない分岐にいたる。「野原」の手入れは極相林への到達を阻んでおり、この手入れによって草花の風景は高度な多様性を備えることになる。その多様性は十年にわたる実験でもなお安定することがなかった (Clément and Jones, 2006, p.62)。

荒地や放棄地を観察すれば明らかなように、人間との交渉がほとんどない土地では、強健な種やアレロパシーを持つ種だけが優勢になったり、遷移相が進んで樹林になっていたりすることが多い。毎年おこなわれる草刈りは優勢種が全域を被ってしまうのを防ぎ、遷移を毎年初期化することで草花を活性化させている。クレマンが完全に環境にゆだねることなく、草刈りによって最後まで残しておこうとするものとはそれゆえ、草花の変化と多様性なのである。この引用文からは、クレマンが環境の記述から風景の経験へと推移していく様がよく分かる。その前半部分では、クレマンは生態学者のまなざしを持って、環境の特性を観察し、記述する「観察者」として語っている。庭から遠く隔たった「野原」のなかで、年に一度の手入れは風景を構築するために行われるのではなく、たんに環境の勢いを促すために行われているだけだ。それゆえこの草刈りは、「作業員」としての庭師がおこなう管理としては最低限のものでしかない。しかしながら、この単純な草刈りによって構築されていく草花の変化と多様性は、この生態学者に「思いがけない分岐」と「高度な多様性」を発見させ、驚きを与えている。だからこそ、クレマンはこの場所を「草花の風景」として認識するのである。

「野原」の観察記録によれば播種した65種の内21種は発芽しなかった。にも関わらず、後にはカモガヤを含むイネ科植物をすべて除いても、80種以上が確認されている (Clément, 2007 (1991), p.245)。「思いがけない分岐」と「高度な多様性」と言われるのは、ここには毎春草花が芽吹くたびに異なる種が出現することにたいする驚きがあり、一年生や二年生の植物がまったく異なる場所に現れることにたいする驚きがあるからだ¹⁸⁾。こうした不意の変化は、ほとんど手を入れていない「野原」にとっては環境の特性を翻訳したものでしかない。しかしクレマンが荒地を「ひらめく秩序の美的なうつろい」とまで呼んでいるように、こうした変化は「野原」の風景に「ずれ」(decalage)を生じさせ、そこに「特別な次元」をつけ加えていく (Clément,

2007 (1991), p.260)。これこそが、きわめて放棄地に近いこの場所で、クレマンが最低限の草刈りとともに残そうとする風景の美的次元だろう。しかしこうした「ずれ」から生じる発見や驚きは、ロジェの言う環境から切り離された「風景」からはほど遠いものになってしまっている。

ずれは些細なものに思えるかもしれないが、本質的な現象である。ずれはまるで触媒のように作用し、思いもよらない反応を引き起こす。ずれはまた、それを生んだ背景を超え出る特別な次元を風景に挿入する。また、この次元は主観的なものなので、ときに親密なものでもある。

ずれを含んだ状況の面白さは、観察のダイナミズムをとり戻させることにある。[...] わたしの庭では、最初のホンアマリリス (*Amaryllis belladonna*) が現れると、その周りの空間が変化したように思われた。この花は葉もまともわずに、むき出しの土から荒々しく、素早く姿を現し、ワタシギク (*santoline*) や丈の低いプラム (*prunier*) の上に花を咲かせる。ホンアマリリスが咲いた後では、わたしはこの特徴のないプラムを違ったふうに見ることになる (Clément, 2007 (1991), p.65)。

ここでは植物の変化が「ずれ」を生じさせ、それによって風景が変貌し、周囲の植物の見方にもその変化が波及する様子が描かれている。さらに面白いのはクレマンがこうした風景の「ずれ」を再び「観察のダイナミズム」に結びつけていることだろう。ここで庭師のまなざしは、ふたたび生態学者のそれに変容し直しているからだ。環境の変転によって風景が異なるものへと変容し、風景の変容は環境のいっそうの観察を取り戻させる。この風景の変転と植物や環境の変転とのあいだの移行関係こそが、クレマンが風景と環境をともに含むと言う「庭」の創出へとつながっていく。ここでは環境は風景の特性を帯びており、風景は環境の特性を帯びている。こうした発想こそ、クレマンが荒地から引きだしたものであり、〈動いている庭〉の背景に透かし見られるものなのである。

結びに代えて

こうして冒頭に掲げた言葉、つまり庭が風景と環境を同時に含み、そしてまた庭が、まさに人間と自然の関係の現実である、というクレマンの主張を理解できる。本稿で検討してきたように風景と環境は、一方から他方へ、他方からも一方へと翻訳され、移行することができるような関係にあり、クレマンはそれを庭のなかで明らかにしているだろう。こうしたクレマンの特異な主張の背景には、人間とそれ以外の諸存在を「生きているもの」(*vivant*) として同一平面で捉えようとする、クレマン独自の哲学がある。

わたしが生きているものと呼んでいるものは、多様な自然と数多くの人類をともに含んでいる。庭は「自然」の創造性に「人間」の技を結びつける。庭は [...] 意識を持つ存在、すなわち人類と、[...] 宇宙の残りのものとの関係の特権的な舞台としてあらわれる (Clément and Jones, 2006, p.11)。

クレマンが指摘するように、自然とは、そもそも創造的で自律的な動きを持っており、この創造性に人間の技が結びつけられているのだとすれば、自然は人間の営みを限定するだけのものではない。それどころか、自然が多様であればあるほど、人間がそこに結びつけうるものも多様化する。それゆえ、少なくとも庭においては、人間の行為は生態学的な環境によって決定されているとだけ言うことはできず、風景が多彩なのは、人間がそこに多様な解釈を与えるからだとだけ言うこともできない。むしろ庭では、風景の側面と環境の側面の両方が翻訳をとおして緊密に結びつき、ともに多様化していく。だからロジェのように庭を環境から切り離し、美的で文化的な「風景」の側面だけに充てようとするのは誤りですらあるだろう。とはいえ、こうした着想は伝統的な庭や風景の観念に囚われているままでは気づかれることさえないかもしれない。この庭師は荒地に手を入れるなかでこそ、そこに満ちている植物の自由な動きと多様性を新しい風景としてまなざすことになったのであり、そこから〈動いている庭〉を構想していくことにもなったのである。

注

- 1) 本稿は立命館大学国際言語文化研究所主催の国際フォーラム、『風景の美学——伝統と現代』（2012年2月17日。科学研究費補助金基盤研究(B)「“認識”と“構築”の自然の風景像——二一世紀の風景論」代表仲間裕子）で発表した「第三風景——ジル・クレマンにおける風景と環境」を加筆修正したものである。
- 2) ジル・クレマンはパリのアンドレ＝シトロエン公園やケ・ブランリー美術館の庭、リールのアンリ・マティス公園、南仏ヴァルの地中海性気候の庭など、フランス各地の庭や公園を手掛けていることで知られる庭師である。本人は庭師という伝統的な呼称を好んで使うが、国立ヴェルサイユ高等修景学校出身という背景を持っており、手掛けているプロジェクトの規模からも、その活動は庭師という呼称では収まりきれない。特異な制作手法とその理論的背景は数々の著作にまとめられており、そこで語られる奇妙な概念群——〈動いている庭〉(Jardin en mouvement)、〈惑星としての庭〉(Jardin planétaire)、〈第三風景〉(Tiers paysage) など——とともに世界的に注目を集めている。
- 3) “paysagiste”は「ランドスケープ・アーキテクト」と訳出できるが、日本語としての座りの悪さから、本稿では「修景家」と訳出した。前註の学校名も同様。
- 4) フランスの歴史家、アラン・コルバンによれば、「風景とは、必要とあれば感覚の及ばない空間を読み解き、分析し、表象し、美的評価を与えるために図式化し、意味と情動で満たす、そうしたやり方である」。こうした定義によって風景は「物質性によって規定された風景の観念」、つまりある種の環境決定論から峻別される。こうすることで空間は解釈の多様性、すなわちコルバンの言う「風景の評価システム」の多様性を確保するのである (Corbin and Lebrun, 2001, pp.10-14 (pp.11-14); cf. Corbin, 2005)。またエルンスト・ゴンブリッチは風景の発見を世界の発見に結びつけたヤコブ・クリストフ・ブルクハルト (Bruckhardt, 1978 (1860), pp.190-206 (pp.329-349)) の定式に逆行する、風景画から風景感覚への流れを指摘している (Gombrich, 1966, p.118 (p.301))。またエルンスト・ロベルト・クルツィウスは、風景の概念が誕生する遥か以前にもすでに、人々が実際の自然の眺めではなく、文学的伝統のなかで誦い継がれてきた限りでの自然の眺めを誦い上げてきたことを明らかにしている (Curtius, 1954 (1948), pp.191-209 (pp.267-293))。こうした図式的な整理がクレマンのそれとある程度整合性を持つことは明らかだ。しかし「環境」や「世界」の能動性や風景との結びつきをあまり考慮しないこの一連の流れとクレマンのあいだには深い断絶がある。むしろそれらは直後に検討するロジェの立場に近いものだろう。

- 5) ロジェはイタリアの庭園史家、アントネッラ・ピエトログランデの言葉を引きながら次のように述べている。「伝統的に「庭」ということで次のような空間が意味されている。つまり、閉ざされ、切り離された内部の空間、人間によって彼ら自身の楽しみのために耕され、きわめて実用的なあらゆる目的から離れた空間である」。こうした美的な役割は、場合によっては境を接して他の目的と結びつくことがある。たとえば食料や薬品にするために、菜園や「ハーバリウム」が、観賞用の庭と隣り合う場合がそうである。とはいえ、美的な役割を他の目的と混同することはできないだろう」(Roger, 2001, pp.86-87)。
- 6) 「動いている庭」とはクレマンの庭にたいする考え方や手法につけられた名前でもあり、著作の名前でもあり、また実際の庭の名前にもなっている。考え方や手法の場合は山括弧を、著作の場合は二重カギ括弧を、庭の名前の場合はカギ括弧を充てた。
- 7) 「動いている庭」で用いられた種子のリストは以下を参照。Clément, 2007 (1991), pp.193-197.
- 8) もちろん、どの季節にここを訪れるかによって、「動いている庭」の印象はまったく違ったものになる。八月に訪れた際はこうした草花が足の踏み場もないほどに溢れ、ベンチでさえ今にも葉叢に飲み込まれそうな状態だった。しかし枯れた草花は冬のあいだに刈りとられ、三月に訪れた際にはほとんど芝地と化していた。そこでは、ところどころに早春のヨーロッパの風物詩であるクロッカスが無作為に群生し、鮮やかな紫の花を咲かせていた。
- 9) 「生物学的事実と呼ぶるほどに達したそれは、おそらく後戻りできないほどに、あらゆる考え方や着眼点を覆した。十九世紀に生物学はなく、ただ生きた諸要素の数々だけがあった。しかし今ではそれらの「あいだ」で起こることが十分に意識されている」(Clément, 2007 (1991), p.16)。
- 10) 「動いている庭」で用いられたジギタリスの品種は“*Digitalis “Exelsior Hyblids”*” (Clément, 2007 (1991), p.196)。なお、以後登場する植物名にはクレマン自身が指示している場合、あるいは植物リストなどから判明する場合に限りラテン語を記す。判然としない場合はクレマンが記したフランス名を記す。
- 11) 強調は筆者による。
- 12) ここで“milieu”は「環境」と訳出したが、クレマンは「環境」を意味する二つの言葉、“milieu”と“environnement”をある程度分けて使用しており、前者を重視している。“environnement”をスペイン語の“medio-ambiente”と対比し、前者は周囲と距離を保ったもの、後者は「距離を置くというよりむしろ、浸りきった状態を暗示している」として、“milieu ambiant”を肯定的な意味合いで使用しているため、クレマンにとって“milieu”は「媒質」とでも訳出すべき性質を持っている (Clément, 2012, p.23. 強調は著者による)。
- 13) “La friche apprivoisée, 1985 ” この論文は以下の論文集にルイザ・ジョンのコメントとともに再録されている。Clément, 2006, pp.19-30.
- 14) なお、次段落でおこなう各図版の説明は基本的にクレマンが付した短いキャプションにしたがっている。
- 15) 余談だが、ジル・クレマンはカメルーン北部で蛾の新種、“*Bunaepsis clementi*”を発見しており（言うまでもなく“clementi”はジル・クレマンの姓、“Clément”からとられている）、ここで「植物学者や生態学者のまなざし」というのは、少なくとも自然の観察力という意味では、それほど誇張ではないだろう。もちろんこれは比喩的に言うのであって、植物学者や生態学者が環境をしか相手にせず、風景には頓着しないということを意味しているのではない。むしろそういった単純な分割が成立しないことを示すのが本論の狙いである。
- 16) 「野原」で用いられた種子のリストは以下を参照。Clément, 2007 (1991), pp.240-243. また、ここでの実験は同書第十三章に詳しく記述されている。
- 17) 実のところ、この土地は三つの区画に分けられている。4,500m²に及ぶ主要区画と1,000m²の小区画は耕して整地され、主要区画には本文中にあるとおり65種類の種子が播種されたが、1,000m²の小区画には播種せず、主要区画で繁茂した植物の種子が自然散布され、コロニーを形成する様子が観察された。残る1,500m²の小区画はカモガヤが蔓延る初期状態のまま放置され、残る二区画との比較対象とされ

た。ここでは文脈上必要な主要区画に絞って検討する。

- 18) クレマンの観察によれば、周辺地域には確認できない高山植物のホソバナデシコ (*Dianthus carthusianorum*) が、おそらくは鳥によって「野原」に突然もたらされたという (Clément, 2007 (1991), pp.248-249)。

文献

- BURCKHARDT, Jacob Christoph, *Die Kultur der Renaissance in Italien, Ein Versuch. Gesammelte Werke III*, Basel-Stuttgart, Schwabe, 1978 (1860) (柴田治三郎訳『イタリア・ルネサンスの文化』(世界の名著第五六巻所収) 中央公論社, 一九七九年)。
- CLÉMENT, Gilles, *Le jardin en mouvement. De la Vallée au Champ via le parc André-Citroën et le Jardin planétaire*, Paris, Sens & Tonka, 2007 (1991)。
- , *Manifeste du Tiers paysage*, Paris, Sujet/Objet, 2004。
- , *Où en est l'herbe? Réflexions sur le jardin planétaire*, Arles, Actes Sud, 2006。
- , *Jardins, paysage et génie naturel*, Paris, Fayard et Collège de France, 2012。
- CLÉMENT, Gilles and JONES, Louisa, *Gilles Clément. Une écologie humaniste*, Genève, Aubanel, 2006。
- CORBIN, Alain, *Le ciel et la mer*, Paris, Bayard, 2005 (小倉孝誠訳『空と海』藤原書店, 二〇〇七年)。
- CORBIN, Alain and LEBRUN, Jean, *L'homme dans le paysage*, Paris, Textuel, 2001 (小倉孝誠訳『風景と人間』藤原書店, 二〇〇二年)。
- CURTIUS, Ernst Robert, *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*, Bern, Francke, 1954 (1948) (南大路振一, 岸本通夫, 中村善也訳『ヨーロッパ文学とラテン中世』みすず書房, 一九七一年)。
- GOMBRICH, Ernst Hans, *Norm and Form. Studies in the Art of the Renaissance I*, London, Phaidon, 1966 (岡田温司, 水野千依訳『規範と形式——ルネサンス美術研究』中央公論美術出版社, 一九九九年)。
- ROCCA, Alessandro (ed.), *Gilles Clément. Nove giardini Planetari*, Milano, 22publishing, 2007。
- ROGER, Alain, "Dal giardino in movimento al giardino planetario", in *Lotus navigator*, n° 2, apr. 2001, pp.70-89。
- 山内朋樹「新しい庭は人間なしでつくられるのか——ジル・クレマンの庭とその思考」『あいだ／生成』第二号, あいだ哲学会, 二〇一二年, 十二—二八頁。

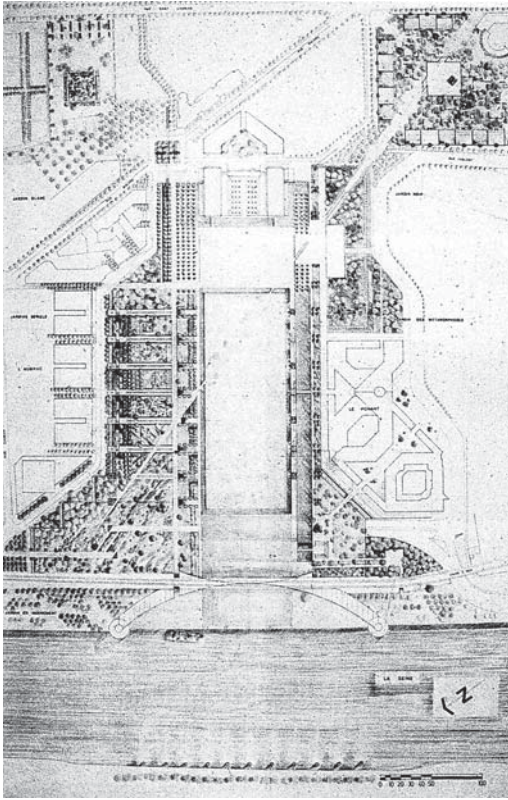


図1 アンドレ=シトロエン公園プラン
(Clément and Jones, 2006, p.94.)



図2 「動いている庭」部分 (2011年8月筆者撮影)



図3 「谷の庭」部分 (2011年8月筆者撮影)

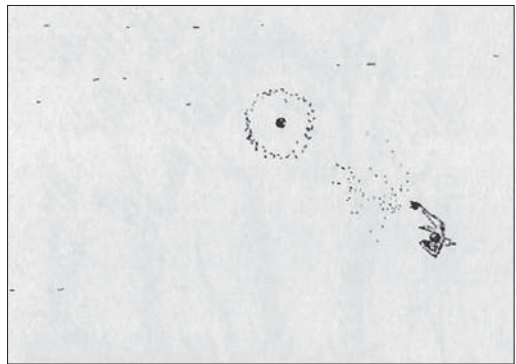


図4 ダイアグラム1 (Clément, 2007 (1991), p.232.)

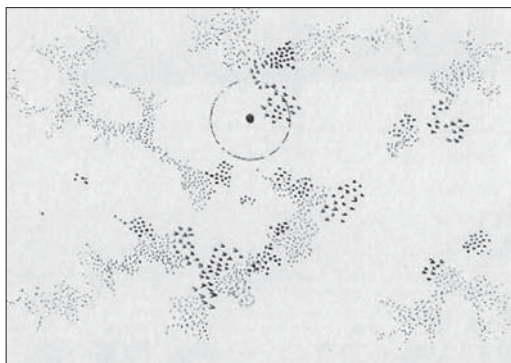


図5 ダイアグラム2 (同)

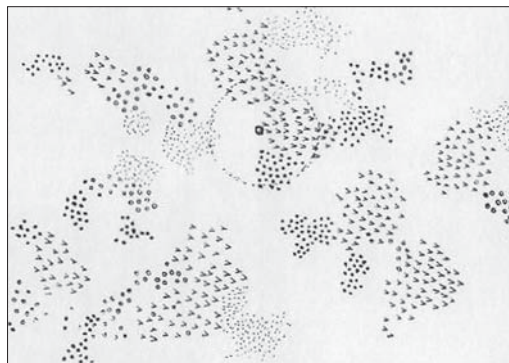


図6 ダイアグラム3 (同)

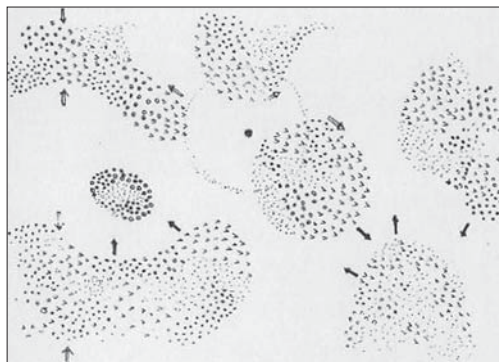


図7 ダイアグラム4 (Clément, 2007 (1991), p.233.)

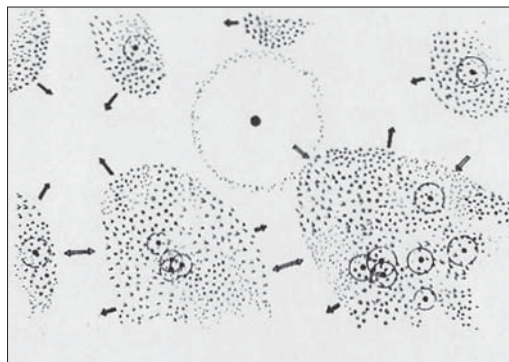


図8 ダイアグラム5 (同)

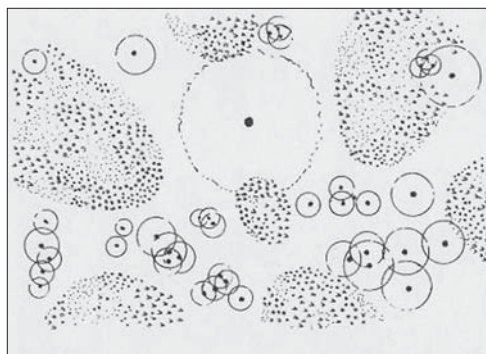


図9 ダイアグラム6 (同)



図10 「野原」部分 (2011年8月筆者撮影)